

## 四つの場所を移動するアン・エリオット

中 村 ひ ろ 子

*Persuasion* は Jane Austen が存命中に完成させた最後の小説であるが、その評価は大きく分かれる。Virginia Woolf が「変わった美しさと、変わった重苦しさがある」<sup>1</sup>と評したことは有名である。Tony Tanner は「もうひとつの小説」<sup>2</sup>と捉え、David Cecil は傑作と断言する。<sup>3</sup>『説得』にはそれまでのオースティン作品にはない要素が認められるということで、それだけにいっそう魅力があるということでもある。

主人公アンが父親の浪費による負債で代々の Kellynch-hall を賃貸にだし、一家が Bath へと転居するところからこの小説は始まる。ジェントリであるエリオット家の居場所の喪失と経済的衰退から物語は始まるのである。アンはケリンチを出た後、妹の嫁ぎ先 Uppercross へと赴き、ハーヴィル大佐が住む Lyme-Regis へ一泊の旅に出、最終的には Bath で父姉と合流する。アンは4つの場所——ケリンチ、アッパークロス、ライム・リーズ、バース——を移動することになる。

Catherine Belsey は *Culture and the Real* において *Pride and Prejudice* で表された Pemberley House を分別と富の合一の表象と解する。<sup>4</sup> 自然と調和して立つペンバレー館は象徴的意味を担う〈場〉と言える。ペンバレーを訪れたエリザベスは自分の属すべき〈場〉としてその妥当性を認めるのである。彼女のダーシー氏への偏見は氷解し、富と分別の結合が可能な場所へと、自分が育った世界 (“the the sphere, in which you (Elizabeth) have been brought up”)<sup>5</sup> から移動するのである。このようにヒロインの居場所探しの典型を『自負と偏見』に認めることができる。ケリンチ館からアッパークロスへの移動にあたって、アンはそれぞれの「共同体」(“social commonwealth”) の楽しむべき話題があるとした見解

(第3章)を示す。楽しむべき話題とは、共同体で重視される生活規範に関わるものであり、価値観と言い換えられよう。共同体を一つの〈場〉とするならば、それぞれの〈場〉が価値観の指標を表すと見ることができる。準男爵エリオット卿の館ケリンチはジェントリを、妹メアリーの嫁ぎ先アッパークロスのマスグローブ家はヨーマンということになる。ウェントワースの友人で海軍軍人ハーヴィル大佐が住む海岸沿いのライム・リーズは新興階級(海軍軍人)が一時的居住地として選んだ場所だ。最後にアンが向かった都会バースはさまざまな階級が混在する場とみることができる。階級については David Cannadine によれば、18世紀から19世紀にかけてのイギリスは階級社会というよりも「ミツバチの巣」的ヒエラルキー社会であったという<sup>6</sup>がここでは便宜上概略的階級分けをした。

ケリンチ—アッパークロス—ライム・リーズ—バースの4つの場所とそこにおける生活の描写と場所の移動に伴う主人公が捉えた価値観の差異を本論のテーマとして取り上げる。『説得』はオースティンのそれまでの作品とは異なる内容と展開となっている。これは作家オースティンが今までとは異なる価値観を持つに至ったためではないのかも、<sup>7</sup> 併せて検証していくことにしたい。

手がかりの一つとして、アンの述懐にある「年を経るに従い、ロマンスを学んだ」(“she learned romance as she grew older” p.29)<sup>8</sup> の「ロマンス」を念頭に置き考察を進めて行くことにする。『説得』は1815年8月8日に書き始められ1816年8月6日の間に書き上げられた、<sup>9</sup> 主人公アンの愛の喪失と復活とを描いた作品である。1810年代はロマン派後期の詩人達の活躍が目覚ましい時期でもある。Walter Scott の *The Lady of the Lake* が1810

<sup>1</sup> Virginia Woolf, *The Common Reader* · 1 (London : The Hogarth Press, 1984), p.143.

<sup>2</sup> Tony Tanner, *Jane Austen* (London : Macmillan, 1986), p.211. Tanner (p.209) はまたアンは常に自分のいる場所の移動をよぎなくされる人物であるという見解は、〈場〉の移動と言う観点から『説得』を論ずる筆者には極めて示唆的である。

<sup>3</sup> David Cecil, *A Portrait of Jane Austen* (London : Constable, 1980), p.187.

<sup>4</sup> Catherine Belsey, *Culture and the Real : Theorizing Cultural Criticism* (London : Routledge, 2005), p.82.

<sup>5</sup> Jane Austen, *The Novels of Jane Austen*, 5 vols .ed. R.W.Chapman (London : Oxford U.P., 1973), III, p.356.

<sup>6</sup> D. キャナダイン『イギリスの階級社会』平田雅博・吉田正弘訳(日本経済評論社、2008), pp.101-79.

<sup>7</sup> 『説得』では「今までのように日常生活のおもしろさに関心を抱いてはおらず、今までやろうとしなかったことを、試みている。世界は自分が思っていたよりも神秘的でかつロマンチックであることを発見し始めたのでは」と Woolf (pp.143-44.) は指摘。

<sup>8</sup> Jane Austen, *Persuasion*, ed. Gillian Beer (London : Penguin Books, 1998), p.29.『説得』の引用は全てこの版による。以後引用した頁を文中に記載する。

<sup>9</sup> Catherine Sutherland, *Jane Austen's Textual Lives : from Aeschylus to Bollywood* (New York : Oxford U.P., 2007), p.148.

年に、Byron の *Childe Harold's Pilgrimage* が1812年、*Corsair* が1814年と次々に作品が発表された。作品中に言及されるバイロンやスコットの作品は、オースティンが感情描写の強い彼らの作品を読んだ体験を物語る。理性と散文の時代から感情を題材としたロマン主義の新しい文学が世間の耳目を集める時代へと転換していた。しかしながら『説得』ではバイロンやスコットは肯定的に捉えられていない。彼らの詩が「絶望的苦悩」「打ちひしがれるほどの悲惨」と言った激しい感情を扱うもので、こうした非日常的な感情は一般の読者には危険であるとアンに語らせ、モラリスト達の著作に親しむように薦めさせる。依然として理性的な道德主義者オースティンは存在している。

これまでのオースティンの作品は恋愛から結婚への過程を、抑制された距離感を保ちながら会話による性格描写を巧みに用いることで描かれて来た。本小説では作者はヒロインの内面へと入り込み、揺れ動く恋心と湧き上がる恋の情熱を描写することに傾注したかに思われ、その結果語りの不統一、揺れと混乱が見られる。<sup>10</sup> 従って理性と感情とのバランスを保つことで愛を獲得してきたこれまでのヒロインと異なる様相を呈することは当然なのかもしれない。時代の文芸思潮—ロマン主義—に挑戦する形でオースティンはロマンスを扱い、批判的に描こうとしたのか。即ち「思った通りに愛し合うことができた」(“They were able to love each other, even as well as they intended”)『自負と偏見』のエリザベスから「感情の爆発」(“burst of feeling”)を重視したヒロイン—アンへの変化を検証したい。intend には *OED* によれば to have in the mind as a fixed purpose : to purpose. design とある。つまり愛し合うことに意志の働きが加わること、愛するという感情には意志された意図が関係しており理性主導型で、明らかにロマン派的「強い感情の自然の流出」(“the spontaneous overflow of powerful feelings” *Preface to Lyrical Ballads*, by Wordsworth)とは異なる。intend から spontaneous (『説得』p.172)への、すなわちロマン派的なオースティンの恋愛観の変化の表れと考えられるのだ。後期ロマン派というよりも、前期ロマン派 William Wordsworth の詩作のプロセスとアンの内面描写との類似性について検証することも

本論のもう一つの論点であることを付け加えておく。<sup>11</sup>

エリオット卿が「準男爵名簿」(Baronetage)に末娘メアリーの結婚と妻の死去の期日を記入するところから物語は始まるが、名簿に家族の記録を書き込むことに重要性和誇りを抱くエリオット卿の人間像が浮き彫りとなる。浪費がたたりケリンチ館を貸しに出すことになる展開のなかで、領主としての意識の希薄さと対照的に世間体を重視する虚飾性は、浅薄な人間性を表す。『自負と偏見』でダーシー氏が領民から信頼と尊敬を得ていることと比較するならば、大きな差異が両者には認められる。それはエリオット卿の無責任で身勝手な人間的卑小さのあらわれであるが、姉エリザベスの同質な生き方を合わせると、個人としての人間的資質というよりも、彼らが属するジェントリにたいするオースティンの間接的批判と解することができる。<sup>12</sup> ペンバレーやローズングズの明確な景観描写と比べるとケリンチ館の具体的な記述の欠乏がこれを傍証する。従って精神的支柱という点では、ケリンチはエリオット卿と同様に、もはややらない。エリオット卿がケリンチを離れる時、見送りに来た領民らと別れる場面が次のように描かれる。

The party drove off in very good spirits; Sir Walter prepared with condescending bows for all the afflicted tenantry and cottagers who might have had a hint to shew themselves; and Anne walked up at the same time, in a sort of desolate tranquillity, ...It was painful to look upon their deserted grounds, and still worse to anticipate the new hands they were to fall into; and to escape the solitariness and the melancholy of so altered a village... (pp.34-35)

“with condescending bow” とうやうやくおじぎをしながら表面上は良き領主を演じつつも、エリオット卿の皮相な処世術が浮き彫りとなる。彼を見送るように命じられた農夫や小作人らは苦しそうな表情をうかべて突っ立っている。苦しそうな表情がこれまでのエリオット卿の仕打ちのせいなのか、あるいは突然の転居という領主としての義務の放棄を知って生まれたものなのかは、明確ではない。「何か侘びしく静まり返った心

<sup>10</sup> Tanner (p.244) は「Fanny Price と Anne Elliot の相異はファニーは事態を正しいものに戻すことが出来たが、アンは社会が混乱しすぎて事態を收拾することができない」と論じている。

<sup>11</sup> ワーズワスの共通点について論じたものを幾つかを挙げる。(1) Stuart M. Tave “Jane Austen and one of her contemporaries”, *Jane Austen Bicentenary essays*, ed. John Halperin (London : Cambridge U.P., 1975), pp.61-74. オースティンと同時代人であるワーズワスの想像力を主に、両者の差異を論じたもの。(2) Adela Pinch, *Strange Fits of Passion : Epistemologies of Emotion, Hume to Austen* (California : Stanford U.P., 1996), p.145. 記憶と主観性を強調する点でワーズワス的であると分析。(3) Gene W. Ruoff, “Anne Elliot's Dowry : Reflections on the Ending of *Persuasion*”, *Modern Critical Views: Jane Austen*, ed. Harold Bloom (New York : Chelsea House Publishers, 1986), p.66. オースティンがワーズワスの未発表の作品を読んでいないことは明らかだが、『説得』の語りにおいて同じ方向性が認められるとしている。

<sup>12</sup> John Wiltshire, *Jane Austen and the Body* (Cambridge : Cambridge U.P., 1994), p.157. はオースティンが『説得』を書く頃までにジェントリへの信頼を失くすとみる。

を抱いて」（“in a sort of desolate tranquillity”）ラッセル夫人の家に向かうアンの姿が続く。さらにラッセル夫人はエリオット一家が退去した後のケリンチを見るに忍びないという思いで、「変わり果てた村」（“so altered a village”）を見ることに苦痛を覚える描写となっている。ジェントリとしてのエリオット卿の無能と無策を示すばかりではなく、19世紀に入り崩壊を見せるジェントリを象徴的に表したものと見るべきであろう。近代国家としての体裁を整えつつあるイギリスの社会構造の変化は、オースティンが知る南部イギリスにも表れていたということである。1796年に書き始められた『自負と偏見』の第一稿 *First Impressions* では、ペンバレーの主ダーシー氏は小作人や使用人から敬愛される主という設定となっているが、約20年後の1815年から書き始められた『説得』ではエリオット卿に代表されるジェントリの変化が認められたということである。『説得』でのジェントリの崩壊は社会構造の変化であるが、時間とともに人間の「外観」と「内面」もまた変化すること、すなわち人間における時間の作用を取り上げた作品でもある。“altered” は作品を読み解くキーワードの一つである。変化し続ける社会で人間の愛は不変でありうるのか。

アンの滞在地の移動もまた変化のヴァリエーションの一つと考えることができる。パースに向かう父姉とは別にアンは、妹メアリーの看病に嫁ぎ先のアップパークロスのマスグローブ家に向かうが、次のように表される。

Anne had not wanted this visit to Uppercross, to learn that a removal from one set of people to another, though at a distance of only three miles, will often include a total change of conversation, opinion, and idea. (p.40)

その土地が持つ独自の慣習や生活様式があり、それを弁えねばならないことをアンは理解している。

She acknowledged it to be very fitting, that every little social commonwealth should dictate its own matters of discourse; and hoped, ere long, to become a not unworthy member of the one she was now transplanted into. —With the prospect of spending at least two months at Uppercross, it was highly incumbent on her to clothe her imagination, her memory, and all her ideas in as much of Uppercross as possible. (p.41)

“every little social commonwealth should dictate its own matters of discourse” は小さな地域社会における人間関係の密度を示唆する。アンには意識的に滞在先の話題—地域の関心と重要性、言い換えれば一つの価値観にあわせることが、自分の居場所を確保するためには重要であることが分かっていた。“she was now transplanted into” はアンが主体的に選択した場所ではなく移動せざるを得ないニュアンスがこもる。この村にアンが望む帰属すべき価値観は見いだせるのか。

アップパークロスは典型的なイギリスの一村で、マスグローブ家は生活も趣味・余暇も典型的なヨーマンである。狩りに興じ、遠出の散歩やダンスを楽しむ。彼らの生活にも新旧の波は押し寄せていた。マスグローブ家の当主が住む母屋には二人の娘達の趣向に合わせた室内調度が見られる。旧来の生活をおくる両親とは別に当世風の生き方をする娘達—ルーイーザとヘンリエッターである。彼らの考え方も生き方もあたらしい (“Their children had more modern minds and manners” p. 39)。1800年代初めの親子二世に認められた新旧の変化が言及される。平穏で変化に乏しいイギリスの田園風景に見えるが、時代は急速に変化していた。『説得』が執筆された1810年代はナポレオン戦争後のウィーン体制が敷かれ、ヨーロッパは保守化していく時代である。

ナポレオン戦争以降イギリスは対外的には領土拡大政策を取り、そのために海軍、陸軍を強化していくことになった。フランス革命後の対仏戦争では、常備軍だけでは不十分なことから義勇軍（兄ヘンリーも義勇軍に加わる）や私兵が徴集され、<sup>13</sup> 夏はイギリスの要衝に野営し、冬は近くの町村で宿営した。<sup>14</sup> オースティンの小説に登場する軍人は彼女が兄から聞いたことが役立ったと思われる。『説得』は1803年および1804年のライム・リージズでのオースティンの休暇体験と1814年のナポレオン戦争以降の状況を盛り込んだものであるが、<sup>15</sup> 戦争とそれに関わる軍人の存在の広がり、日常生活の中に認められることである。時代の変化をオースティンがどう見たのか。彼女の兄弟たちは海軍に多くかわり、捕獲賞金で財をなした者もいる。カリブ海や西インドの領土獲得と植民地化をオースティンがいかに解釈したのかは、明確には言えない。確かなことは『説得』のヒロイン—アンのかつての恋人ウェントワースが西インド諸島へも行った海軍軍人であることと、親友のスミス夫人の夫が西インド諸島に所有する財産があったことである。

アップパークロスにもどろう。アップパークロスはウェントワースとの再会の場所でもある。滞在先のマスグロー

<sup>13</sup> Nicholas Roe, *Romanticism: An Oxford Guide* (Oxford: Oxford U.P., 2005), p.19.

<sup>14</sup> ディアドリー・ル・フェイ『大英博物館シリーズ 作家の生涯 ジェイン・オースティン』川成洋監訳太田美智子訳（ミュージアム図書、2000）、p.47.

<sup>15</sup> Ibid., pp.90-91.

ブ家は先にも言ったように、ヨーマンを代表する。ヨーマンに対する語り手の立場は、ジェントリよりは明らかに好意的である。マズグローブ夫妻の人柄に関しては、教育という点においては別にしても、一貫して愛情豊かに子供や孫に接する人間味あふれる人たちとして描く。彼らの人柄が村人から慕われ、多くの来訪者がある家庭として表わされ、娘達の要望にこたえハーブを購入できるだけの財力と文化的理解もある。

アッパークロスからウインズロブシャーへの遠出の散歩の道すがら、アンが秋の景観を眺望する語りは、彼女の内面と風景とが照応し、メランコリックな響きを奏でる。植物は冬に向かって翼を折りたたむように生命力を自身の内奥に閉じ込めていく。アンもまたウェントワースへの思いを畳み込み、今後その感情が新たに芽吹き、鮮やかな色と匂いを放つのかは定かではない。しかしながら丘陵の頂から見降ろされる耕された耕作地が春の訪れを待つ農夫の期待を伝える。農作物や植物のみならずアンにもまた訪れる春の可能性を示唆、風景描写は抒情性と心理的色合いを帯びロマン派の特徴を有する。

アッパークロスはウェントワースとの8年ぶりの再会の〈場〉というだけではなく、マズグローブ家の日常生活の描写の具体性から、作者が知悉した〈場〉であることを窺わせるものだ。マズグローブ家の親子と兄妹関係は、家族愛に満ちたもので、アンは自分と父姉との不毛な関係と比較し、軽い羨望を覚える。アッパークロス周辺の風景にしても先ほど言及したように、その描写はイギリスの田園風景を現前させる。アッパークロスへのアンの親近感を看取することはできるが、果たして自分が属すべき〈場〉として捉えたかとなると、不確かである。

アンは妹のメアリーから自分達の馬車を持たないために、義父の馬車で二人の義妹と座席を共にしなければならない不満を語る。このことをマズグローブ一家との近接、即ち彼らの肉体的存在が彼女を病気にさせる一つの脅威としてメアリーが感じたことは暗示的である。アンもまた木から落下した甥を妹に代わって看病したり、幼い甥に背中にしがみつかれて身動きがとれなくなったりと、身体的密着性を余儀なくさせられる。ウェントワースがアンの背中から子供を引き離してやる行為は「家事という義務の息苦しさから解放すること」<sup>16</sup>であったと言える。

アンはルーザーとヘンリエッタの姉妹愛や両親との密接な家族関係に羨望を覚えるが、親密性が時には身体のみならず精神をも縛る枷ともなり、アンの精神の自由を束縛するものともなりうる。クリスマスにおける家族全員揃っての団欒は「大騒ぎ」(“such a domestic

hurricane”, p.126, “the bustles of Uppercross”, p.127) として必ずしも肯定的には捉えられていない。<sup>17</sup> 突堤から落下し、深刻な怪我を負い2階で休むルーザーを思っただのアンのコメントであるにしても、「騒々しさ」にみちたアッパークロス家に滞在し続けた後、ケリンチ館の「孤絶」(“seclusion of Kellynch” p.127) を懐かしむところからも団欒の騒ぎを手放しでは受け入れられないアンの心境が推察される。

「孤絶」(“seclusion”) はアンがエリオット家で疎外された者であること、つまり父姉との異質性のゆえに彼女は排除された存在 (“She was only Anne” p.7) である表れだ。この図式は『自負と偏見』におけるエリザベスと、『マンスフィールド・パーク』におけるファニーにも通じる。本来属する〈場〉(家=家族)における異質性は、彼女たちが別の〈場〉へと移動しなければならない必然性を内包するものである。

外界の事物によって混乱や動揺が生じた折、孤独のうちに黙想することで (“it required a long application of solitude and reflection to recover her” p.75)、体験の客観的判断と精神的均衡をアンは獲得するのだが、このプロセスはワーズワスの詩作の始まりを表した「詩は静寂の中で回想された情緒にその起源を持つ」

(“poetry takes its origin from emotion recollected in tranquility”) を想起させ、その酷似性が注目される。感情の専横からの解放と、一つの価値の固定から解放された自由な精神状態となることを求めるもので、内省的自我というロマン派的特質に繋がる。精神の自由とは、外界の内面への侵入を内省で相対化させる精神活動で可能となる。このようにして自分が属する世界に相応しい価値判断を行い、行動規範を確定できるのである。それを可能にした人物としてクロフト将軍夫人が登場する。

海軍軍人であるクロフト将軍は、ケリンチ館を借り受ける人物として登場するが、当時軍人階級のイギリス社会における認知度は高く、大英帝国の誕生の実質的な立役者と考えられる。オースティンの兄弟も海軍軍人となり成功しており、身近な存在としてオースティンは海軍軍人の栄達と国家への貢献を見聞している。スペイン艦隊を破り、世界に冠たる海軍王国として後の領土拡大と植民地化に多大な貢献をしたイギリス海軍である。オースティンの時代すでにいわゆる帝国主義は始まっていた。『マンスフィールド・パーク』における西インド諸島のアンティグアの言及からも、海外領土におけるプランテーション活動が主要な財源となっていることは明らかである。マンスフィールド・パークを経済的に支えるものとしてアンティグアは不可欠であった。なるほど

<sup>16</sup> Pinch, pp.145-46 & 153.

<sup>17</sup> Pinch (p.146) は *Mansfield Park* では実家に戻った際の喧騒が神経質なファニーには惨めさとして捉えられ、実家との離別の必要性を示すものとなるが、『説得』ではマズグローブ家の人々が作り出す音はむしろ一歩距離をおいて、公平に描かれているとする。

Edward Said が指摘するようにオースティンの作品は帝国主義そのものを表すともいえようが、<sup>18</sup> オースティンが帝国主義を積極的に擁護・支持するものであったとはいえない。なぜならば彼女は自分の小説世界の限界を熟知しており、その限界を決して超えようとはしない作家であって、田舎の2、3軒の家を舞台とした家庭小説を書くことであったからだ。確かに『説得』を書く頃には彼女の姿勢に揺らぎが生じていたと考えられるし、その指摘も先に言及した通り見られる。しかしながら彼女は熟知しない世界に不用意に深入りはしない。筆者はむしろ Mary Lascelles の「クロフト夫妻こそアンの属すべき世界」<sup>19</sup> と捉える観点から、将軍夫人ソフィア・クロフトが担う象徴的役割を考察したい。

海軍に対する共感、基本的には初恋の相手ウェントワースに端を発するのかもしれない。また彼の友人達である海軍軍人の居住地として、ライム・リージスのハーヴィル一家の存在がある。ウェントワースの親友を元気づけるために訪れたハーヴィル夫妻の態度と室内調度は彼らの慎み深さと善意とを表徴する。この点については後で詳しく論じたい。

クロフト夫人の登場に目を向けてみよう。中背の背筋をまっすぐ伸ばし、がっしりとした体格の女性で、日焼けし実年齢よりも老けて見えたが、歯の美しさは彼女の心身の健康ぶりを象徴的に示した。意志と活力に満ち、さっぱりとした女性に思われた。夫と共に戦艦に乗船し、長い間海上で生活したのであるが、その生活をクロフト夫人は戦艦ほど素晴らしい家はないと断言、一番幸せな生活は船上でのものだったという。（“And I do assure you, ma'am,... that nothing can exceed the accommodations of a man of war:...I can safely say, that the happiest part of my life has been spent on board a ship” p.66）船は陸での最上の家に住むのと同様の居心地の良さであるというのだ。女性が戦艦に乗船することを弟のウェントワースは望ましいとは思っていないが、姉のクロフト夫人が反対の見解を披露する。

（“Women may be as comfortable on board, as in the best house in England” p.64）現実的に戦艦に女性が同乗することが快適であるとは考えにくいのであるが、<sup>20</sup>

クロフト夫人に快適といわしめるものは何なのか。他国の戦艦や海賊船との戦闘の危険に晒されるだけではなく、天候と言った自然条件や船という限られた空間の中で日々の生活、即ち生き抜くことと如何に対峙するか、その姿勢が常に問われる。意志の決定と実行を外からの干渉、他者の介在なく遂行させる心地よさをクロフト夫人は言っているのではないか。<sup>21</sup> 周囲の人間の反対に会い、説得され婚約を破棄したアンとは異なり、固定観念に囚われずに自由に人生を選択し生きたクロフト夫人であるのだ。作品中に頻出するアンの「孤独の中での回想」（“recollection in solitude”）は、疎外された状況で、回想しながら体験を見直していくプロセスだけではなく、あらゆる外界からの干渉から自由な状態で、理性的に判断する環境の必要性を暗示したものとも言える。体験—回想—体験の意味付け（＝詩作）はワーズワスが *Lyrical Ballads* 「序」（1800年版以降）の詩論において展開した詩作の過程に酷似することは既に指摘したが、時代状況が生み出した偶然ともいえる。因みに『抒情民謡詩集』の「老水夫行」は当時海軍で song-book であったという。実験的新しい『抒情民謡詩集』が巷間で確実に読まれていた証左である。<sup>22</sup>

結婚後海上での生活で、日焼けした顔となったクロフト夫人をアンは否定的には見てはいない。ケリンチ館を海軍将校に貸し出すと決まった時、エリオット卿は海軍嫌いの理由を二つ挙げた。身分の低いものが高い地位へのぼることができることと、海上生活は甚だしい容貌の変化をもたらすことである。エリオット家のお抱え弁護士シェパード氏がクロフト夫人のもう一人の弟の「地方副牧師」（“curate”）を「紳士」（“gentleman”）と呼び、借り手の出自を持ち上げようとした際、エリオット卿はウェントワースなど「取るに足らない」（“nobody”）「平民」（“common”）と一蹴する。また「マホガニー材みたいな赤褐色の、ごつごつざらざらした皺だらけの顔」（三章）で40歳であるのに「60歳か62歳」に見える老けこみ方をしていたと、友人の容貌の変化を残酷に表現するエリオット卿である。常に鏡に自身を映し身体的な美を維持しようとするエリオット卿には時間の刻印は認められない。他方クロフト夫妻には時間の経過は如実に現

<sup>18</sup> E.W. サイド『文化と帝国主義1』大橋洋一訳（みすず書房、2006）、pp.161-89. はオースティンが「マンスフィールド・パークを保持し支配すること、帝国領土を保持し支配することの緊密な繋がりを、理解していた」と帝国主義的オースティンとして論じる。また Tim Fulford, “Romanticizing the Empire: The Naval Heroes of Southey, Coleridge, Austen, and Marryat” *Modern Language Quarterly*, 60, 2, Jun 1999, pp.185-90は「国家のモラルと政治の健全性は陸と海との帝国獲得によって改善される」と説いた当時人気を博した C.W. Pasley の *An Essay on the Military Policy and Institutions of the British Empire* をオースティンがカッサンドラ宛の手紙（1813年1月24日付）で褒めているところから、彼女が国家維持のための海軍の重要性を高く評価したと見る。

<sup>19</sup> Mary Lascelles, *Jane Austen and her Art* (London: Athlone, 1995), p.184.

<sup>20</sup> Brian Southam, *Jane Austen and the Navy* (London: Hambledon and London, 2000), p.278-79. は実際戦艦に妻を乗船させる軍人もいたようであるが、船上では体罰・暴力と言った悲惨な現実があったと指摘。また船上で女性が快適な生活を送るというクロフト夫人の言葉と現実とは大きくことなることについては、オースティンは深入りしていないとも指摘する。

<sup>21</sup> Tanner (p.232.) はクロフト夫人をオースティンが創りだした新しい女性像と述べる。Fulford (p.188.) は船上で体得した活動性と臨機応変さを夫人からアンが学んだとする。

<sup>22</sup> Southam, p.288.

われた。時間の刻印は肉体的・精神的活動のない者には外面的にも内面的にも痕跡を残さないパラドックスも含まれる。<sup>23</sup>

時間に対する意識はアンにも見られる。8年の歳月を経て再会した時、ウェントワースはアンが変わってしまっていて分からなかったと妹メアリーに語ったというが、時間がもたらす身体的変化について敏感に反応するアンである。ウェントワースとの婚約を家族の反対で破棄して以降、後悔の念に包まれた年月を生きてきた。つまり8年前婚約を破棄して以来、記憶の中で生きているに過ぎない。他方クロフト夫人は自身の選択と決断で選びとった人生を生きており、積み重ねられた時間としての過去がクロフト夫人の現在の自信とゆとりとして現われていた。古い慣習や固定観念に囚われない精神の自由を認めたのである。それを可能にしたのは彼女の資質だけではなく、むしろ戦艦上で女性一人の空間に置かれてこそ可能となったのだという、クロフト夫人の見解である。『自負と偏見』においてと同様に、『説得』においても、世間から遮断された (secluded) 〈場〉において精神の自由が可能となると、考えられるのだ。つまり前者においてはペンバレー館であり、後者は戦艦上である。俗悪なベネット家から解放され、ペンバレーの広大な領地の女主人となることで、「分別と富」とが結びつく妥当性の象徴としての館を自分の属すべき〈場〉としてエリザベスは手に入れることができた。他方クロフト夫人の精神的自立にクロフト将軍は少しも関わっていない皮肉がある。男女の (夫と妻の) 関係性が可能にした精神の自立ではなく、内発的な要因によるものなのだ。精神の成熟は他者の存在を意識することを契機として、強い自我意識が回想 (recollection) と内省・熟慮 (reflection, p.115) のプロセスを経て実現されるのであり、この点においてロマン派的と言えよう。<sup>24</sup>

クロフト夫人の如才なさが表れた部分として、遠出の散歩の帰り道で馬車に乗って一行とすれ違った時、疲れたアンを同乗させることになる場面が挙げられる。馬車の上でウェントワースがマスグローブ家の二人の娘の中どちらを選ぶのかと、問いかけた夫クロフト将軍に対する夫人の答えは。

“Very good humoured, unaffected girls, indeed,” said Mrs Croft, in a tone of calmer praise, such as Anne suspect that her keener powers might not consider

either of them as quite worthy of her brother ; “and a very respectable family. One could not be connected with better people—My dear admiral, that post!—we shall certainly take that post.” (p. 85)

両方ともに素晴らしい女性だと表層の観察で、義弟の相手来判断する将軍に対し、より確かな観察力を備えたクロフト夫人であることを、アンを通じ語らせることでクロフト夫人の対応の巧みさを示す。アンがマスグローブ家と姻戚関係にあることを承知の上で、まずマスグローブ家に敬意を表しあえて二人の女性の比較を表明せず、個人としての結びつきの観点をさげ、家との結びつきに一般化し、歓迎するコメントをするのである。彼女自身が「人柄」で結婚を決意したことはこの際棚上げにする。さらにアンの「視点」を挿入することで、クロフト夫人が自分の判断をすぐに披歴せず、自身の見解はもちつつ慎重に対応する姿を描く。“post”は「杭」とともに「地位」とも解され、夫クロフト将軍の出世の舵取り、人生の舵取りを賢明にやってきた夫人の操縦術の巧みさを暗示する。クロフト夫妻が父エリオット卿よりもケリンチ館に住むべき人間とみるアンの見解は将軍夫妻にたいする信頼と評価の高さを物語るものである。 (“...she could not but in conscience feel that they were gone who deserved not to stay, and that Kellynch-hall had passed into better hands than its owners.” p.117)

海軍軍人への期待と賛美は、ウェントワースとともに、ライム・リーجزのハーヴィル一家を訪問した際の語りに、より明白に見ることができる。質素ながらも居心地良く工夫された部屋と、ハーヴィル夫妻の歓待ぶりから、ウェントワースの友人という以外何のつながりもないアン一行を自然に受け入れる夫妻の温かな人柄が窺える。アンがこれまで慣れ親しんできた豪華な家具を整然と配した邸宅のインテリアとは異なり、雑多のものにあふれ (“The varieties in the fitting-up of the rooms” p. 92)、住み心地よく手を加えられた室内であった (“the common necessities provided by the owner” p.92)。ハーヴィル大佐宅でアンが見出したものこそ、海軍軍人の高い位置づけを証明するものであった。ペンバレー館の内部描写を思い出してみよう。エリザベスが感心したの

<sup>23</sup>「仕事に就く必要性のないジェントリは健康と美しい姿の恩恵に最大限浴することが出来るとエリオット卿は考えた。18世紀の土地所有階級は利益のために働く必要性がないため公平であり得たし、それゆえに国家の利益を自身の利益の上に置き、政治に深く関わる事が出来たのであるが、彼の考えはこの18世紀の主張に背理する。エリオット卿は政治に関与せずひたすら自己の外観に拘るところからむしろ女性化されたジェントリの姿を描き出した」と Fulford (pp.187-89) は論じる。

<sup>24</sup> Keith Thomas は “Jane Austen and the Romantic Lyric: *Persuasion* and Coleridge’s *Conversation Poems*” *ELH* 1987, pp.893-924 で オースティンとコールリッジの類似性を次のように論じている。「詩と小説は異なるものであるが、オースティンの作品とロマン派の詩に関しては小説も詩も明らかに認識論的手法に収斂される。」

<sup>25</sup> *The Novels of Jane Austen*, III, p.246.

は、「調和よく調度された部屋」(“It was a large, well-proportioned room, handsomely fitting up”)<sup>25</sup>のセンスの良さであった。varieties と proportioned は「多様」対「均衡・調和」と対比的である。「均衡・調和」は整然とした秩序を示唆、他方「多様」は様々な要素を表す。「均衡・調和」から「多様」の称賛へ価値の転位が認められる事に注目したい。「多様」については港町ライム・リーجزの景観描写のなかにも見いだせる。更にハーヴィル夫妻の美德が描かれる。

...connected as it all was with his profession, the fruit of its labours, the effect of its influence on his habits, the picture of repose and domestic happiness it presented, made it to her a something more, or less, than gratification. (p.92)

仕事（労働）で身に付けたものが習慣となる(“the fruit of its labours”, “the effect of its influence on his habits”)ことはエリオット卿も姉エリザベスも与り知らぬものだ。友情の絆さえあれば寛大に受け入れる度量と惜しめない労苦の美德をアンは海軍軍人の中に見出したのである。自らの労働によって収入をえるのではなく、世襲の爵位によって得られた収入で虚飾の生活を送るエリオット卿に代表されるジェントリを念頭に置く痛烈な批判と捉えられる。友情や持て成しが教養や優雅に取って代わる。もはやジェントリに見出した礼儀作法(manners)からその人物の本質を推察し、測ることは無用となった。<sup>26</sup>つづけてルーザーの海軍絶賛が続く。

Louisa,...protesting that she was convinced of sailors having more worth and warmth than any other set of men in England; that they only knew how to live, and they only deserved to be respected and loved. (pp.92-93)

海軍軍人こそが尊敬され、愛されるに値するとするルーザーの言葉であるが、称賛の根拠として挙げた海軍軍人の「友情」「親しさ」「寛大さ」「正直さ」は一般的徳目に過ぎない。アンとルーザーの海軍評価の差異に留意すべきであろう。海軍についても、海軍軍人についても表層的で明示的なものしか理解しておらず、ルーザーの知性の限界が垣間見られる。

常に周辺的存在であったアンが中央へと進み出、中心的存在となるのは、彼女とウェントワースの傷心の友人ベニックとの関係においてである。ベニックが婚約者の死後メランコリックになり、毎日を読書に費やす日々を

送る。控え目なアンと自然に打ち解け、二人の会話が書物の話題になったとき彼がバイロンやスコットの作品に魅了されていることが分かる。『貴公子ハロルドの巡礼』や『海賊』は水夫とその生活を讃えたものである。Naval Chronicle (『海軍記録』)の題扉に『海賊』の冒頭4行が1814年7月から12月号のモットーとして載せられており<sup>27</sup>当時バイロンの詩が海軍軍人によって愛読された。ところで姉のエリザベスが詩を退屈なもののみならず、完全に拒絶している。

Oh! you may as well take back that tiresome book she would lend me, and pretend I have read it through. I really cannot be plaguing myself for ever with all the new poems and states of the nation that come out. Lady Russell quite bores one with her new publications. (p.202)

新しいファッションならば彼女は直ぐに飛びついただろうが、新しく出版された詩には関心がなかった。他方ベニックは当時評判となっていたバイロンの『異教徒』やスコットの『湖の麗人』を読んでおり、それらについてのアンの評価を知りたがった。最新の文学を知りうる環境にいるエリオット家の人々でありながら、アンは家族とは本についての話題が成り立っていない。対照的に新興階級の海軍軍人であるベニックは新しい文学に関心を持ち、本を手に入れ読み、影響を受けていた。書物全般が知的支配階級から、次第により広い読者層へと拡大、浸透していたことが分かる。ベニックとの文学談義でこれらの詩の「強い感情」(“the strong feelings” p.94)にふれるよりも、精神を鍛え強化する道徳的書物に接するよう助言し、アンの見識の広さがベニックを含む読者に示されることになる。ベニックはアンと文学の造詣の深さを認め、彼女の判断を求めたのである。彼女の教養は、高い教育を受けたエリートの支配階級であるエリオット家においてではなく、自らの行動（労働）によって地位を得た軍人との関わりの中で、発揮される皮肉がある。

しかしながらオースティンはベニックを必ずしも肯定的に描いてはおらず、彼女特有の風刺が見られる。婚約者の病死でメランコリックな状態にあり、スコットやバイロンの詩に慰藉を求めるロマンチックな人間として彼は登場する。その彼が負傷したルーザーを看病しているうちに、恋に陥る。彼女はウェントワースの「意志堅固」であることの重要性を取りちがえ、次第に我意をとおすことが意志の強さであると考え不幸な怪我を負う行動に出てしまい、「説得されない強さ」の例証となる。同時に読者はルーザーがウェントワースのメッセージを

<sup>26</sup> Tanner, p.227.

<sup>27</sup> Southam, p.290.

正しく理解しなかった彼女の知性の不十分さを知る。文学的素養については触れられていないが、アンに匹敵すると女性とは言えない。ルイーザの人間的魅力に惹かれ恋に陥ったのではなく、ベニックの側から「自然に湧き上がった」(“a perfectly spontaneous feeling” p.172)とウェントワースは彼の恋を説明する。23章でベニックが彼の婚約者である自分の妹の死で傷心していたにもかかわらず、新たな恋に夢中になる心変わりをハーヴィルが嘆くと、アンはこういう。「ベニック大佐の心変わりが外的事情によるものでないとすると、内的事情ということになりますわね。つまり彼の本性の仕業、あるいは男性の本性の仕業ということになりますわね。」(“If the change be not from outward circumstances, it must be from within; it must be nature, man’s nature, which has done the business for Captain Benwick” pp.218-19) それは恋したい内的欲求で恋に陥る男性本来の特質からきているのだという。つまり一定の条件が整いさえすれば相手はだれでもよく、衝動的欲求が生んだ恋であるのだと。ベニックとルイーザとの婚約を知った当初アンは、ベニックが愛情深い人なので、誰かを愛さざるを得ないのだと解釈するが、この解釈が「男性の本性の仕業」と言い換えられたものなのだ。ベニックのルイーザへの思いは彼女の人間性に対する共感や理解から生まれた愛ではなく、状況が生み出したもの。同じ屋根の下で若い男女が生活をするうちに、即ち一方が重傷を負い、他方がそれを看病する中で情愛が生まれたに過ぎない。ベニックの恋は読書が彼の魂の深まりに関わるものではないことがアンが発言から理解される。つまり彼は文学を真に理解していなかったのだ。一方ウェントワースのベニック観—ルイーザには不釣り合いなほど精神的苦悩を知る読書家で賢明な男—も又裏切られたことになる。<sup>28</sup> アンが文学を含む読書の限界を認識しており、他方ウェントワースに関してはその認識に誤りがあったことが判明する。ベニックの影響でバイロンやスコットの感傷的瞑想を楽しむルイーザの読書風景を想像するアンを通して、オースティンはロマン派を愛読するベニックを戯画化しており、必ずしも海軍軍人の賛美に終始しているわけではない。

ハーヴィル大佐との愛の永遠性についての会話で「女性の愛は愛する対象が生きていようとしまいと、限りなく愛すること」をアンは説いた。男性は愛する対象が彼のために生きている間には愛は存在するが、眼前から消

えれば男の愛は消滅する。男性の愛は具体的対象の存在に依るが、女性はそうではない。アン主張はそれまでの見方に反するもので、ハーヴィルは直ぐには受け入れがたい。確かに過去の文学には女性の変心を嘆く作品が多い。<sup>29</sup> しかしそれは男性優位の社会の中で、男性だけの声しか聞けなかったせいであるのだ。女の愛の不変性についてのアンの方説は、同じ部屋の片方で聞こえているに違いないウェントワースに向けたアン愛情表現でもあった。彼女の言葉に突き動かされるようにウェントワースは「感情の爆発」したラヴレターを書くことになる。アンが堂々と女性の愛の不変性を論じる間、部屋の片隅で身を固くして聞き耳を立てながら、ペンをはしらせるウェントワースの姿がある。説得されて婚約を破棄した8年前の受動的なアンが、今や聞き手であるハーヴィルだけではなくウェントワースをも説得する立場へと逆転する。

最後に『説得』第二巻の舞台であるバースについての考察に移ろう。アンはバースに到着して直ぐ、この地での滞在を「囚人のような日々」(“an imprisonment of many months” p.128)と表す。都会を一種の牢獄と表すところは、ワーズワスの *The Prelude* 第一巻の冒頭 (“from yon city’s walls set free, /A prison where he hath been long immured”. ll. 7-8)<sup>30</sup>を想起させ、都会と田舎との対比的捉え方の類似性が面白い。故郷湖水地方に強い愛着を持ったワーズワスにとってロンドンに於いては牢獄であった。ハンブシャーの一村に育ったオースティンにとっても田舎こそ自分が住むべき場であり、都会は窮屈な居心地の悪い場としてしか、当初映らなかったようである。<sup>31</sup> 近代都市として生まれ変わりつつあるバースに反発と嫌悪感が強いと言える。バースは当時有閑階級の保養地として注目を集める一方、様々な階級の人々が集まる都会であった。<sup>32</sup> 通りを幾通りか隔て、貴族、ジェントリ、海軍軍人、病人など多様な階級の多様な人々が生活する町であった。音楽会や社交界の描写はそこに集う様々な階級と職業を持つ人間の集まりを垣間見せる。更に、都会における住人の多様性の現われとして病氣療養にきているスミス夫人といわくありげな従兄のエリオット氏の参入を挙げることができよう。

とりわけスミス夫人はアンと同様の階級に属していたものの、人生の辛酸をなめた学友である。十二年振り

<sup>28</sup> Pinch, pp.156-57.

<sup>29</sup> Pinch (p.157) によれば18世紀放埒で多情な女性に満ちた作品が男女作家によって書かれたという。

<sup>30</sup> William Wordsworth, *The Prelude*: 1799,1805, 1850, ed. Jonathan Wordsworth et al. (New York: Norton, 1979), p.28.

<sup>31</sup> 1800年11月母親からスティーヴントンからバースへ移ると、突然告げられた時オースティンはショックで「悲しみのあまり」気を失ったという。ル・フェイ, p.58.

<sup>32</sup> 18世紀のバースは自然豊かな住まいから離れて住むことにしているジェントリを隔離するように計画された幾何学的な円形あるいは四角形の広場にかこまれた町で、明らかに自然は排除されていた。cf. Wiltshire, p.159.



再会した学友には、以前のような美貌と自信に輝くところはなく、病気と貧困とが彼女の容貌を変えてしまった現実をアンは目の当たりにする。しかしそれは外見上の変化に過ぎない。病気や悲嘆にも屈しない友人をアンは確認し、次のような判断を下す。

She (Anne) watched—observed—reflected—and finally determined that this was not a case of fortitude or of resignation only.—A submissive spirit might be patient, a strong understanding would supply resolution, but here was something more; here was that elasticity of mind, that disposition to be comforted, that power of turning readily from evil to good, and of finding employment which carried her out of herself, which was from Nature alone. It was the choicest gift of Heaven; and Anne viewed her friend as one of those instances in which, by a merciful appointment, it seems designed to counterbalance almost every other want. (p.145)

「柔軟な心」(“that elasticity of mind”) が数々の苦難を乗り越えてきたスミス夫人にはあるのだと。物事を楽しみ、楽観的に考え、夢中になるものを見つけることが出来る性格。ウェントワースとの別離後無為にすごしたアンの時間をスミス夫人の体験が埋める構図となる。<sup>33</sup> 看護師であり、良き話相手でもあるルック夫人について語るスミス夫人の次の言葉は、彼女が健康と財源の欠乏の中で如何に自身の状況を積極的に受け入れたかが示される。

Hers (nurse Rooke's) is a line for seeing human nature; and she has a fund of good sense and observation which, as a companion, make her infinitely superior to thousands of those who having only received 'the best education in the world,' know nothing worth attending to.... she is sure to have... something that makes one know one's species better. (p.146)

人間を看、人間性を観察して来たルック看護師の話は最良の教育を受けた人間にもまさるものであり、人間をより正確に教えるものであるという。この言葉は第二巻のハイライトである、ハーヴィルとアンとの愛の不変性についての論議における、アンの見解を逆照射する。男性の愛の不変性に関して、彼は過去の文学作品では、男

性の愛の永続性しか描かれていないと主張するが、それに対し、アンはこれまで書くことは男性の手にゆだねられてきたからだ、と、反論する。即ち女性が、自らの愛の不変を描くことができなかつたからであって、女性に愛の不滅を求めることができないからではないのだ、というのである。実際に女性の愛の永遠性はアン自らが証明するものであるのだ。文学に表されなかつた女性の愛の永続性を語ることで、女性の変節を理由に偏見へとつながるハーヴィルの女性像に修正を加えようとするオースティンの意図が読み取れる。男性の領域であった韻文によってではなく、散文という新しい文学ジャンルによって女性の愛の真実を描くというオースティンの強い意識が窺える。

作家はアンに「病室とはたかさんの本が供えられたものかもしれない」(“A sick chamber may often furnish the worth of volumes.” p.146) といわせる。教育だけが知識を得る手段ではなく、ルック看護師のような優れた観察に基づく人間理解は万の書物に値するのだという。しかしこの見解はアンのロマンチックな理想論である。「病室で見られるのは弱さで、強さではない。寛大さや強さではなく、むしろ我儘といら立ち」だと修正するスミス夫人の言葉は、現実を直視してきた彼女のリアリスティックな態度を物語り、スミス夫人はオースティンだという解釈を可能にする。

彼女との再会で学んだ知恵が、従兄エリオット氏の真実の姿を看破させたと筆者は考える。ライム・リージーズでの不幸な出来事を、バースに着き父姉に話すが、彼らは関心さえ示さなかつた。しかしエリオット氏は事故について関心を示し、父姉との態度の違いをアンに印象付けて、一時エリオット氏を好意的に捉えさせる。しかし直ぐにエリオット氏の本質がアンに依って焙り出されることになる。スミス夫人との交流で学んだ経験の意味付けが応用されるのである。礼儀正しきよりも人間として重要なものが何かを発見したアンのエリオット氏の分析は

Mr. Elliot was rational, discreet, polished,—but he was not open. There was never any burst of feeling, any warmth of indignation or delight, at the evil or good of others...She prized the frank, the open-hearted,...She felt that she could so much more depend upon the sincerity of those who sometimes looked or said a careless or a hasty thing, than of those whose presence of mind never varied, whose tongue never slipped. (p.151)

<sup>33</sup> スミス夫人の解釈については二つに分かれる。Cecilは「スミス夫人は生きたところのない機械じかけの人間」と完全に否定的である。『オースティン・ブロンテ（世界文学大系28）』青木雄造訳（筑摩書房、1968）、p.428。他方 Wiltshire (pp.182-83) は「アンはロマンチックだが、オースティンはそうではないことをスミス夫人が明らかにする」として肯定的に捉える。

礼儀よりも、率直さを、冷静で失言などをしない人間よりも、慌てて不注意なことを言うてしまう人物に誠実を見る。注目すべきは、アンがエリオット氏には「感情の爆発」(“burst of feeling”)がないことを挙げたことである。理性によって験された愛情しか認めていなかったオースティの新たな方向性を示すものとして注目される。「生まれと礼儀良さ」は交友関係を選ぶ際に不可欠というエリオット氏の言葉と実体との乖離を見抜く。エリオット氏との結婚を勧めるラッセル夫人の言葉を聞きながら、アンに心を通じたエリオット氏像は引用したような結論に達した。その人間分析のプロセスは、アンがスミス夫人と再会し、不遇の身でありながら快活さを失わない彼女を、「見、観察し、熟慮し、決断する」“watched—observed—reflected—and finally determined”過程であった。この方法論はスミス夫人との会話のなかで、アンが会得したものなのだ。スミス夫人との会話は、人間観察の手法をアンに確立させたと言え、その意味において、この作品におけるスミス夫人の役割は大きいと言える。人間が経済的、身体的危機のなかで、精神の荒廃を起こすことなく、いかに生き抜くことが出来たかの例証としてスミス夫人は登場させられる。28歳までケリンチ館に住み、世間知らずの思念的アンに対し、属する階級から転落し苦渋の人生の〈現実〉を受容せざるを得なかったスミス夫人は、都会の多層な人間存在を印象付けることになる。

第二巻ではアンとウェントワースの立場が逆転、内なる情熱によって行動へ駆りたてられるアンに比し、ウェントワースは行動する軍人というよりも、ライム・リージズでのルーザーの事故を境に、優柔不断にさえ見える。第一巻では海軍軍人としての勇姿を想起させる登場であったが、第二巻では一転。ルーザーの事故を食い止めることが出来なかった自責の念からか、バースにおけるウェントワースは感情を抑制した行動をとる。話しかけるより話しかけられる立場に、近づくよりも近づかれると言った具合だ。ルーザーの事故は、彼が説いた「堅固な意志」の重要性を、ルーザーが誤った形で実行したことで起きたものであった。ウェントワースの警告を押し切り、突堤から飛び降りる無謀な行為に出たのだ。この事故までウェントワースはマズグローブ家の二人の娘との親密ぶりを見せていた。ルーザーがヘンリエッタを抑え、ウェントワースの心を獲得したかに思わせる行動をとってきた。カップルとして行動する二人を見、アンは一時的にウェントワースを諦めかけさえしている。自分との婚約を一方的に破棄したアンにウェントワースは屈辱感を抱いていただろう。時折アンへの思いを垣間

見せる行動をとることもあったものの、ウェントワースがルーザーとヘンリエッタのどちらかを結婚相手に選ばざるを得ない抜き差しならぬ状況に自らを追い込んでいくかに思われた。アッパークロスのマズグローブ家では会話の中心人物として海軍における過去の武勇を語り、居合わせた人々のみならず読者もまた、海軍軍人としての活躍を印象づけられた。しかしながら第二巻におけるバースでは行動する人間としてはなく、アンやその他の人間から見られる人間へと変位する。8年ぶりにバースの通りで、ラッセル夫人はウェントワースを見かけるのであるが、その場面は次のように描かれる。

...she (Anne) was yet perfectly conscious of Lady Russell's eyes being turned exactly in the direction for him, of her being in short intently observing him. She could thoroughly comprehend the sort of fascination he must possess over Lady Russell's mind, the difficulty it must be for her to withdraw her eyes, the astonishment she must be feeling that eight or nine years should have passed over him, and in foreign climes and in active service too, without robbing him of one personal grace! (pp. 168-69)

婚約を破棄するように説得したラッセル夫人に、8年後のウェントワースへ目を向けさせ、「優雅な容姿」から彼女の判断の誤りを認識させたいアンの強い願望が示される。明らかにラッセル夫人はウェントワースの優美な姿に目を留めたはずである。彼の外観が内面を語るのに十分であるとアンは見ているが、アンはラッセル夫人から彼についての感想を聞くことはできず、自分が見入っていたのはカーテン生地だったと夫人にははぐらかされる。ラッセル夫人が彼の優雅さを見て、過去の自分の判断が必ずしも正しいとは言えないことを悟ったかどうかはわからない。従兄エリオット氏がそうであるように、外観に人間の本質の全てが反映されるわけではない。我々読者は既にライム・リージズでの事故でウェントワースの無力振りを見ているのだ。<sup>34</sup>果たしてアンは客観的にウェントワースを見ているであろうか。感情に浸潤されたウェントワース像をアンは語っていないか。

演奏会においてもウェントワースのハンサム振りがダーリンプル夫人とエリオット卿の目に留まる。

“A well-looking man,” said Sir Walter, “a very well-looking man.” “A very fine young man indeed!” said

<sup>34</sup> Cecil (『オースティン・ブロンテ』 p.430.) はこの場面について「ウェントワースの同情心に富んだ想像力は事件がルーザーの両親にどんな影響を与えるかをすぐさまに描いた」ために咄嗟の対応が取れなかったとする。衝撃の大きさと迅速に適切な対応がとれず、むしろアンが冷静に指示を出す展開から、この解釈の妥当性はないと思われる。

Lady Dalrymple. "More air than one often sees in Bath.—Irish, I dare say." "No, I just know his name. A bowing acquaintance. Wentworth—Captain Wentworth of the navy. (p.177)

地位や出自などの名目上の価値で他者を判断する彼等に「容貌が良い男」とみられることは彼らに認知されたことを表すものである。但し（純粋種イギリス人ではなく）アイルランド人だろうと推測するダーリンブル夫人の追加のコメントと挨拶をする程度の知り合いとするエリオット卿の言葉は容姿の良さを認めながらも、自分たちとの差別化を図ることで彼との差異を暗黙のうちに確認し、自己の階級的優位性に帰着するものでしかなかった。

エリオット卿がアンとウェントワースの結婚を承認するのは、ウェントワースの見栄えの良さが身分の高いアンとの結婚に均衡を与えると自分を納得させたからである。アンの社会的地位の高さと同様の価値があるウェントワースの外観である。（"he (Sir Walter Elliot) was very much struck by his personal claims, and felt that his (Wentworth's) superiority of appearance might be not unfairly balanced against her (Anne's) superiority of rank" pp.232-33）成り上がりの最たるものとして海軍を嫌悪したエリオット卿がウェントワースを受け入れざるを得ない価値の転換が見られる。ジェントリナーのマナーは（外観の）優美としてその社会的優越性を保証し可能にしてきたはずであった。しかしながら二女アンの軍人との結婚を容認するにあたって、ウェントワースの外観とアンとの地位が等価とみる価値の転換で、新興階級の侵入の不快をかわず心理作用が見られる。ウェントワースが海軍における昇進で地位を得たこと、捕獲賞金で財をなしたことは確かである。しかしながら8年前に婚約に反対した当時と同様に彼の出自に変わりはなく、上流階級とのつながりもできたわけではない。彼の優美さは8年間の海軍における規律と自制に依る労苦（labor）が作り上げたものである。エリオット卿は外観においてさえも、新興階級の海軍軍人にとって代わられるところまで時代は変化しているのである。エリオット卿はその現実を否定することはできなかった。

外観の良さが繰り返し語られる都会において、ウェントワースの勇敢な軍人としての姿はアンの観念の中に存在するだけで、現実は見掛け倒しの張りぼての男性になりかねない。勇猛果敢な軍人の姿を地上で見ることが出来ず、海軍における階級や捕獲賞金による財力で軍人と

しての能力を知るだけだ。その危険性を免れることが出来たのは、アン・エリオットの愛情とモラルとに支えられ、地上における一時的行動力の欠如のダメージが回避されたからである。二人の結婚後、妻アンの友情のために、スミス夫人の西インド諸島における所有不動産の回復に尽力、行動の人ウェントワースの姿が最終的に戻ることになる。<sup>35</sup>

アンがパースについて父姉に再会した折、彼らがパースの生活に満足していることを確認する。本来の住まいケリンチ館に負債が嵩み住めなくなり、パースへ都落ちしなければならなくなった立場にありながら、その真実が隠ぺいされる場—都会—であるのだ。虚実が混在する場所であり、エリオット父姉のように地位に拘泥し、その内実は空疎な人間であっても受け入れられる虚飾の生活が可能場所でもある。虚飾性を埋めるものとしてのスミス夫人という現実を直視した学友との再会の挿話である。

4つの場所を巡るアンの移動は、8年前の恋人ウェントワースとの復活した愛の確認、そして結婚で終わることになる。つまりアンの属すべき〈場〉は海軍軍人の妻として将来は戦艦上である可能性が高い。海上を航行する戦艦の不定性は、そのまま小説の構造自体の不安定性に通じ、主人公アンの心理の安定性に影を射すことになる。構造上の不安定さは、第二巻の最終二章が推敲されることで、全体の一貫性が崩れたことにもある。すなわち語りの観点からみると、ウルフが指摘した通り落ち着きの悪い作品ということになる。アンの心理の揺れがそのまま、第二巻全体の揺れとなっていることが挙げられるのではないかと、考えられるのだ。即ち第二巻においてパースでウェントワースと再会する前後のアンは、強い恋心に突き動かされ、その情動に全身を委ねた格好となり、「不安」("anxieties")「興奮」("agitation")「喜び」("pleasure & delight")「苦悩」("pain")に揺れ「困惑した」("confused")存在となる。この揺れは当時の社会の流動性と呼応すると見るべきであろうか。<sup>36</sup>感情の横溢の自然な表明と解すべきか。<sup>37</sup>

自分が属すべき〈場〉(the sphere to which one should belong)として海軍軍人を選び、その結果今後は戦艦上の生活の可能性が示唆される。海軍軍人に認められる規律と自制(discipline)で培われた礼儀作法(manners)にアンは新たな価値を見出したのである。ケリンチ館と言った「土地に基づく妥当性」(propriety grounded in property)の指標である礼儀作法とは異なるものである。もはやそれは機能しない時代—帝国の誕

<sup>35</sup> Jocelyn Harris, *Jane Austen's Art of Memory* (Cambridge: Cambridge U.P., 2003), p.196はウェントワースが海上と陸地において立派な行動で真の紳士たることを証明されたと見る。Fulford (p.186)は紳士の男性性とは相続したものによってではなく、(軍隊の)行動によって試された行儀とモラルによってであるとオースティンが再定義したとする。

<sup>36</sup> Tanner, p.218.

<sup>37</sup> Ibid., p.219.

生一に差し掛かったことをオースティンは予見していたのかもしれない。ロマンスを追及した「不自然な始まりの自然な結果」の皮肉な結末ということなのか。愛は不

変であっても、二人の生活が戦艦上であるのならば地理的到達点は見えず、<sup>38</sup> 幸福の瞬間は不定である。

---

<sup>38</sup> Ruoff, p.61.